世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

唐代前期の仏頂尊勝陀羅尼

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下野, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/353

唐代前期の仏頂尊勝陀羅尼

下　野　玲　子

はじめに

仏頂尊勝陀羅尼は広い地域で信仰されてきた陀羅尼の一つである。中国では7世紀後半の唐代初期に漢訳されて以来、各地方に伝播し、長期にわたり信仰されてきた歴史があり、奈良時代には日本にももたらされ、現在も多くの宗派で用いられている。

この経典は陀羅尼の部分にきわめて異本が多いことがよく知られている。例えば『大正蔵』所収本の仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼経』では、底本に用いた高麗本と校勘に用いた宋本（資福思渓蔵）・明本（径山蔵）とでは陀羅尼が大きく異なるため、経文中に含まれる陀羅尼とは別に経末に宋本と明本の陀羅尼を付加し、あわせて3種の陀羅尼を掲載している[1]。

この他、仏陀波利訳と同本異訳といわれる杜行顗訳『仏頂尊勝陀羅尼経』、地婆訶羅訳『仏頂最勝陀羅尼経』、地婆訶羅訳『最勝仏頂陀羅尼浄除業障呪経』、義浄訳『仏頂尊勝陀羅尼経』の4本は、経本文にそれぞれ細かい相異はあるにしても、善住天子の因縁譚をはじめとする構成は共通している[2]。しかし、陀羅尼は『大正蔵』所収本で見るとそれぞれ異なっている。また、不空訳や善無畏訳、武徹撰『加句霊験仏頂尊勝陀羅尼記』の陀羅尼、法天訳、さらにチベット訳、梵本や中央アジア諸言語の尊勝陀羅尼まで含めると相当な数の異本があって、これらについてはすでに先行研究で詳細な分類が行われている[3]。

私の専門分野は美術史であり、実のところ陀羅尼については専門外であるが、ここしばらく研究テーマとしてきた中国・敦煌莫高窟壁画の仏頂尊勝陀羅尼経変の制作背景として当該経典の信仰状況を知るため、陀羅尼経幢などの中国各地における初期の遺例について情報を収集するよう努めてきた。とくに8世紀初頭に描かれたと推定される莫高窟第217窟の壁画は現存最古の尊勝経変であるが、この時期はまさに『仏頂尊勝陀羅尼経』流行の初期に相当する。そこで、現段階では尊勝経変の解明に直接影響するものではないが、この信仰の最初期である初唐末期から盛唐期にかけての唐代前期における、信仰の地理的分布状況と漢文表記からみた陀羅尼の系統について、これまでに入手できた資料によって明らかにしておきたい。

1　仏陀波利本漢訳とその後の陀羅尼改定

『仏頂尊勝陀羅尼経』の陀羅尼に異本が多いことについては、仏陀波利訳本の経序にその事情の一端が書かれている。経序の前半は五台山文殊の霊験に深く関わる伝説的内容だが、ここでは霊験譚部分は省略し、後半の訳文を重点的に記す。（　）内は原文にはないが、意が通じるよう

に補って解釈した部分である。

婆羅門僧仏陀波利は儀鳳元年（676）に「西国」から漢土の五台山を訪れ、老人から『仏頂尊勝陀羅尼経』の将来を勧められ、二度目に来朝した永淳２年（683）にその梵本をもたらし、皇帝に献上した。皇帝は日照三蔵（地婆訶羅）を請い、司賓寺典客令の杜行顗等に勅してこれを翻訳させたが、その経は宮廷に留められて外に出なかった。そこで仏陀波利は経を世間に流布するために梵本の返却を請い、西明寺に行き、梵語をよく解する漢僧順貞と共に諸大徳にも協力を得て翻訳した。訳し終わると仏陀波利は梵本を携えて五台山に入り、今も出てこない。現在、前後に翻訳するところの両本が世に行われ、その中の少々の語は一致しないが、幸い怪しむことはない。垂拱３年（687）に定覚寺主の僧志静が神都（洛陽）の魏国東寺で日照三蔵に会い、逗留をたずねたところ、（翻訳の由来は）前に述べたとおりであった。志静は彼から14日かけて神呪の梵音を一句ずつ授けられ、それは梵音が具足して一つも間違いのないものである。さらに「旧翻梵本」を取って校勘し、脱錯のあるところを尽く改定した。（経文中の）呪の初めに注して「最後別翻」というのはこの改定した陀羅尼である。その呪句は杜行顗の訳したものとやや相違があるが、新呪は改定して錯誤がなく、またその音に注を施してある。後世この呪句を学ぶ者は幸いに詳しく知ることができるであろう。永昌元年（689）８月、大敬愛寺にて西明寺の上座、澄法師に会い、（翻訳について）尋ねるとやはり前説と同じであった。翻経僧の順貞はいまなお西明寺で健在であるという。この経は幽顕を救抜することもっとも不可思議である。（後に）学ぶ者がこの由来を知らぬことを恐れ、具に委曲を記して後世に伝えんとするものである。

この経序が伝える漢訳年は他の資料と矛盾するところがあって問題も多いが、ここでは特に経の翻訳順序と陀羅尼の改定の経緯に論点を絞ってみておきたい。

まず、経序の成立年代については、明記されていないが、最後に出てくる年月が永昌元年（689）８月であるのでこれが上限であり、「神都」や「魏国東寺」などの語から推して少なくとも武周期（690～705）には成立したと推測される。[4]

つぎに、文中に「前後に翻する（ところの）両本」、また「杜令翻するところのもの」とあって、仏陀波利本以前に訳されたのは杜行顗訳１本のみであるかのような印象を受けるが、同本異訳として伝わる４本のうち、武周期を過ぎて710年に漢訳された義浄訳本を除くと、杜行顗訳『仏頂尊勝陀羅尼経』の他に、地婆訶羅訳『仏頂最勝陀羅尼経』、地婆訶羅訳『最勝仏頂陀羅尼浄除業障呪経』の３本が関わってくる。なかでも地婆訶羅訳『仏頂最勝陀羅尼経』には沙門彦悰が撰述した経序があり、それによると杜行顗訳は儀鳳４年（679）正月５日に成り、地婆訶羅訳はその不備を補い、彦悰も訳者に連なって永淳元年（682）５月23日に完成したという。ここでは地婆訶羅のもう１本の訳には言及していないため、『最勝仏頂陀羅尼浄除業障呪経』はそれより後の翻訳と考えられる。ところが、彦悰の経序は仏陀波利や梵本の入手について一言も触れておらず、そこでの２本の訳年は仏陀波利訳本の経序が示す梵本将来と翻訳の年よりも前であり、内容に齟齬が生じる。

訳経年が矛盾することはすでに開元30年（718）の智昇撰『開元釈教録』巻９で指摘され[5]、研究史上でも問題視されてきた。翻訳年については訳場に列した彦悰自身による記述の方により信憑性があるのに対し、仏陀波利訳本経序の梵本将来と翻訳の年代には信頼がおけない。ただ、志静が地婆訶羅にまみえた箇所で「その逗留を問うに一に上説の如し」という記述があり、文末

近くにも西明寺上座澄法師に「その逗留を問うにまた前説の如し」と同様の記述があるところを見ると、「上説」「前説」とは経序の前半で述べている翻訳の経緯のことを指すと考えられる。このような文からは翻訳の経緯の中でもとくに仏陀波利の五台山における霊験が虚妄ではなく真実であることを殊更に強調しようとする意図が感じられ、他の異訳本や年代についての正確な情報にはあまり注意を払わなかったものと思われる。しかしながら、杜行顗らの後に仏陀波利が訳したという翻訳の順序についてはとくに疑う必要はないのではないかと考える。仏陀波利訳本の翻訳年については、その経序には従えないと記す『開元釈教録』においても、4本の翻訳の順序は杜行顗、地婆訶羅（『仏頂最勝陀羅尼経』＝第一訳）、仏陀波利、地婆訶羅（『最勝仏頂陀羅尼浄除業障呪経』＝第二訳）と記しており[6]、これに従っておきたい。

さて、以上の仏陀波利訳本の経序の内容に関して今回もっとも注目したいのは、改定陀羅尼を「最後別翻」したと述べている点である。経本文は前半の途中で世尊が帝釈天に向かって陀羅尼を説き、その後に陀羅尼の功徳や受持法などの説明が続くのだが、経序付きの経であれば、この経中の陀羅尼のほかに経末に改定陀羅尼が付加されているのが正しい形態であるといえよう。『大正蔵』本の校勘によると宋本・明本・甲本（黄檗版浄厳等加筆本）には経中陀羅尼の直前の経文「即ち呪を説きて曰く」の夾註に「此呪最後別翻」という語句があるという[7]。これは序が付された時に加えられた夾註と考えられ、やはり経末に別に陀羅尼を付加している証左となろう。ところが、『大正蔵』所収本とその校勘本には経中陀羅尼はあっても経末の陀羅尼はない。経序を有する仏陀波利訳本で経末にも陀羅尼が付いているのは、後に触れる天平11年（739）の奥書をもつ奈良朝写経1点しか知られていないのである。

2　唐代前期の作例

仏頂尊勝陀羅尼経の中国における初期の作例は、陀羅尼の文言まで明らかにできる資料の入手が難しく、とりわけ紀年を有する作品は限られていることから、中国全域にわたる分布状況について正確な判断を下すことはできないが、ある程度の傾向を捉えることはできよう[8]。唐代前期のみに限ってみても、同じ仏陀波利訳本の間で異なる表記の陀羅尼が数多く見いだされている。

唐代の漢文尊勝陀羅尼の系統分類については、藤枝晃氏によるスタイン収集敦煌写経中の尊勝陀羅尼を分析した論考がもっとも参考になる[9]。また近年では中国龍門石窟研究所の王振国氏による龍門石窟摩崖刻経と洛陽所在の経幢を中心とする緻密な比較研究があり、中国における最古例も分析されているが、日本の古写経には言及されていない[10]。この二篇の成果をふまえつつ論を進めたい。

ここでは天宝期までの唐代前期における作例を漢文表記によって分類し、現存最古の作例である天授2年本、特殊な註をもつ龍門石窟蓮華洞本、もっとも多い系統に属すると考えられる1本の全文を掲げる。なお、特に断らない限り、その陀羅尼を含む経文はすべて仏陀波利訳である。

(1) 房山天授2年（691）本〔第7洞77〕[11]

北京市郊外房山区の石経山雲居寺に保存されている膨大な石経のうちの一つである。2000年以降、『房山石経：隋唐刻経』の影印拓本により全文を確認できるようになり、王振国氏も現存

最古の『仏頂尊勝陀羅尼経』刻経として紹介している。縦長長方形の石板の表裏に経序のない仏頂尊勝陀羅尼経と蜜多心経を刻し、最後行に則天文字の「天授二年」銘がかろうじて読める。陀羅尼はその他の中国作例と同じく経中陀羅尼のみで、音註や句番号などの夾註を入れず、語句を区切らずに記している。刻文の陀羅尼は第10行の途中から第14行の途中までになるが、ここでは紙数と説明の都合上、実際の行数に関係なく記す。また異体字はできる限り正字であらわす。

那謨薄」□□□□□□□□□鉢羅毘失瑟吒耶勃陀耶薄伽跋帝怛姪他唵毘輸馱耶
娑摩三漫多嚩婆娑娑破囉拏揭底伽訶那娑婆嚩輸提阿鼻詵者麼麼蘇揭多跋折那
阿蜜唎多毘囉雞阿呵羅阿呵羅阿瑜散陀羅尼輸馱耶輸馱」□□□□□□提
□□尼沙毘闍耶毘輸提娑訶娑囉喝囉濕弭僧珠地帝薩婆怛他揭多頞地瑟吒那頞地
瑟恥多慕嗢隷□帝梨抭拔折囉迦耶僧訶多那輸提薩婆婆羅拏毘輸提鉢羅底你□怛
耶阿瑜輸提薩末耶地瑟」□□□□□□怛□多部□俱胝鉢唎輸提毘薩普吒歩地
輸是闍耶闍耶毘ぞ闍ぞ耶ぞ薩末囉薩末囉薩婆歩馱地瑟恥多輸提跋折唎跋折囉
揭鞞跋折濫婆婆覩麼麼薩婆薩埵那迦耶輸提薩婆揭底鉢唎輸提　薩婆怛他　　」
□□□□□□□□□□地瑟恥帝歩嗢歩嗢蒲馱耶蒲馱耶三漫多鉢唎輸提薩婆怛他
揭多頞地瑟吒那頞地瑟恥帝娑婆訶

陀羅尼本文の訳字のみを比較すれば、後に述べる天平写経の経中陀羅尼に近いが、まったく同じというわけではない。＊を付けた箇所は天平写経と音は類似しているが異なる字である。また、ゴシック体にした箇所、すなわち第2行の「麼麼」、第5行の「□帝梨抭」、第7行の「薩婆」などは天平写経にも他本にもない文字で、第9行冒頭10字分の欠損箇所も天平写経では8字（揭多三摩濕婆娑頞）であるから5文字多い。房山天授2年本の場合、夾註は石刻のもとにした底本に最初からなかったのかもしれないが、刻字の際に省略したという可能性も考えられる[12]。

（2）蓮華洞外如意元年（692）刻経、および馮公行宝塔神功２年（698）刻経

蓮華洞外刻経は、河南省洛陽市の龍門石窟蓮華洞に向かって右側の窟外崖面上部に、史延福という人物が如意元年4月8日に刻したものである。清代の葉昌熾は『語石』で『仏頂尊勝陀羅尼経』のもっとも早い例として挙げており[13]、比較的古くから存在が知られている。仏陀波利訳であることを明記しているが、経序はない。明代に上から「伊闕」の大字が刻まれたため、文字が消滅した箇所がかなりある。夾註を二行にせず本文よりやや小さく一行であらわしている。陀羅尼は藤枝氏による敦煌写経の分類G本と一致する。この系統本は敦煌写経に数点存在することが指摘されているが、いずれも紀年はなく、この蓮華洞本が最も早いと考えられる[14]。

一方、馮公行宝塔頌は、北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』（以下『北図拓本』と略称）第18冊に拓本が掲載されているが、経名が示されていないため、従来仏頂尊勝陀羅尼の遺例として取り上げられてこなかったようである[15]。「馮公行宝塔頌」と題し、神功2年（698）の刻、石は河北涿県南魯坡村にあると註記し、宝塔頌1枚、「仏説地獄経」2枚[16]、尊勝陀羅尼1枚の計4枚の拓本を掲載している。宝塔頌は損壊甚大で影印からは紀年銘が確認できないが、第9行に則天文字の「日月」、第11行に「奉為　金輪□□…」という武則天の称号の一部が見えるため、武周期（690～710）の刻字ではあろう。宝塔自体はすでに失われていて詳細は不明である[17]。尊勝陀羅尼拓本は右上部が欠損し、最初のほぼ10字分などが不明だが、第1

行から第14行までが陀羅尼、第15行から最後の第29行までが仏陀波利訳本の経中陀羅尼の後につづく経文となっている[18]。

陀羅尼は夾註までほとんど蓮華洞本と一致し、蓮華洞本に次ぐ古例となる。ただし、藤枝論文中にG本として全文が掲載されている敦煌写経S.2845は陀羅尼の文字が完全に残っているのに対し、これら石刻2本には原石の欠損箇所が多く、またS.2845と異なり句番号は入っていない。馮公行宝塔本の方が蓮華洞本より残存部が多いためこちらを元にし、やや煩雑になるが、蓮華洞本の欠損箇所に下線を付け、逆に前者で欠損し蓮華洞本にある文字はゴシック体であらわし、両者で異なる文字には＊を付して提示する[19]。□は両者で欠損あるいは判読できなかった箇所である。

納慕婆伽勃低□半 嗱嚟盧継耶*啉*邏底毘始瑟咤耶咤去長耶軽 勃馱耶
□啞他□重反唵去重喉聲 毘輪馱耶娑磨三漫多*嚩婆娑馱去重耶軽三平漫
去長 駁破邏拏揭底伽訶那娑婆*嚩秫提伽訶並上那娑並上婆重阿毘瑟拓耶蘇揭多趺折
那拓軽耶軽開口 阿蜜栗多苾囇雞蜜栗連囉煞半頞訶囉頞訶囉訶上囉平 阿瑜珊馱邏尼馱重喉聲邏去尼平
輸馱耶輸馱耶馱重喉聲耶軽 伽伽那毘秫提伽並上那去毘上 嗚瑟膩沙毘闍夜秫提莎訶娑囉
*喝囉濕弭珊珠地低莎去開口訶喉聲上開口與下囉連喉喝囉珊僧半薩婆怛他伽多地瑟咤那*阿地瑟恥低慕
啞嗡婆去重他伽去多開口咤去喉聲啞嗡連 趺折*囉迦耶僧訶怛那秫提折重囉上迦去耶軽提重薩婆娑囉拏毘秫提
婆去囉去長毘上 鉢邏底你磨怛耶阿輸秫提磨去怛軽娑磨那地瑟社低地上 磨你磨你磨末半 怛他多部
多倶知鉢唎秫提怛他去多上 毘薩怖*咤勃地秫提薩塞半咤平 社耶社耶毘社耶毘社耶*駊麼囉*駊麼
囉麼末半勃馱*阿地瑟恥多秫提馱重多去長 趺折嚟趺折囉揭鞞折重 趺折嚂婆嚩都磨摩受持
者於此自稱姓名 寫斯何反 薩婆薩埵那迦耶毘秫提迦上長 薩婆伽底鉢*唎秫提伽上 薩婆怛他伽多
駁磨濕嚩娑地瑟社低地去伽上嚩去長 勃啞耶勃啞耶唦馱耶三漫多鉢唎秫提姪去重地耶反耶軽唦重弾脣喉聲馱
重漫去 薩婆怛他伽多地瑟咤那地瑟社低他伽去多開口喉聲地去吒去那開口喉中取頞遊聲 莎呵莎平開口喉中有遊□呵喉注平上去入者従四聲借音
讀注半音者有兩半聲注二合者半上連促轉舌聲讀注重者帶喉中聲重讀注長聲者長引聲讀注反者従反借音讀傍加口者轉舌聲讀

この陀羅尼は音註がきわめて詳細であるが、とくに末尾に「平・上・去・入と注するものは四声に従い音を借りて読む。…」と、夾註の文字の発音方法についての説明文がつくことは大きな特徴である。夾註は一句ごとにまとめて記されており、他の系統本が本文の一字ごとに註するのとは区別される。注意すべきは、夾註では複合子音を「連」と記しているのに末尾の説明文では「連」ではなく「二合と注したものは…」と記し、軽声を示す夾註「軽」には説明文で言及しないことである。

(3) 開元・天宝期に多い陀羅尼

この系統は本文訳字や夾註の表記に細かな差異のある類似作例がきわめて多いが、ここでは代表として比較的早期の作例である開元16年（728）の陝西省隴県開元寺経幢を挙げておく[20]。

那謨薄伽跋帝一 啼入隷路迦稽耶反鉢囉底毘失瑟咤引耶余何反下同二 勃陀引耶薄伽跋帝三
怛姪他四 唵引五 毘輪馱耶娑摩三漫多嚩父可反下同婆引娑六 娑撥囉拏揭底伽訶那娑婆引

囀秫輪律反下同提地七 阿鼻詵去者蘇揭多伐折那八 阿嚴嘿多毘曬罽平九 阿上訶囉阿訶囉下同十
阿引瑜散陀引囉尼十一 輸馱耶輸馱耶十二 伽伽那毘輸秫提十三 烏瑟尼沙毘逝耶秫提十四
娑訶娑囉喝囉濕弭珊珠地帝十五 薩婆怛他揭多地瑟咤引那阿地瑟恥帝慕姪隷十六
拔折囉迦引耶僧訶多那秫提十七 薩婆伐囉拏毘秫提十八 鉢囉底你伐怛耶阿引瑜秫提十九
薩末耶阿地瑟恥帝廿 末你末你廿一 怛闥多部多俱胝鉢唎秫提廿二 毘薩普吒勃地秫提廿三
社耶社耶余何反下同十廿四 毘社耶毘社耶廿五 薩末囉薩末囉勃陀阿地瑟恥多秫提廿六
跋折犁跋折囉揭鞞廿七 跋折藍婆伐都廿八 摩摩某甲 薩婆薩埵嗚迦引耶毘秫提廿九
薩婆揭底鉢唎秫提卅 薩婆怛他揭多三摩濕婆娑遏地瑟恥帝卅一 勃陀地耶反勃陀同上
蒲陀耶蒲陀耶三漫多鉢唎秫提卅二 薩婆怛他揭多地瑟咤引那遏地瑟恥帝卅三 娑婆引訶

この陀羅尼の句切りの数・位置と反切の文句・位置に重点を置いて分類すると、同系統の本として開元26年（738）7月22日造経幢（経幢所在地不明）[21]、開元年間と推定される河南偃師市敬愛寺経幢[22]が挙げられる。これらには隴県経幢と異なって経序が付いている。さらに、夾註の文言に多少の違いがあるが本文の訳字がほぼ同じものを範囲に入れると、中国国家図書館所蔵拓本の開元14年（726）江蘇丹陽経幢、天宝元年（742）経幢（経幢所在地不明）、天宝4年（745）四川閬中県鉄塔[23]、開元年間頃の四川安岳臥仏院第46号窟刻経[24]も近い系統となり、中原だけでなく四川・江南など広い地域で見られる。これらは藤枝氏の敦煌写経分類ではB本とその夾註がやや異なるC本（スタイン本で最多）、および両者の特徴が混在しているものに相当する。

3　天平写経の二つの陀羅尼

和歌山県高野山正智院に所蔵される天平11年（739）の奥書をもつ仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼経』写経（紙本墨書、国指定重要文化財）は、漢字表記の尊勝陀羅尼の系統やその伝播について検討する上できわめて重要な作品である。この写経は、奥書によれば聖武天皇が玄昉僧正の病気平癒を祈願して『仏頂尊勝陀羅尼経』を一千巻書写させたうちの一巻である[25]。経序、経文、経中の陀羅尼、経末の陀羅尼がすべて揃っている希少な例である。なお、経中陀羅尼の＊は房山天授2年本と異なる漢字、経末陀羅尼のゴシック体は杜行顗訳本（後述の天宝宝字4年写経）と比較して語句の欠落した箇所、下線部は天平写経にない字、＊は異なる字である。

(1) 経中の陀羅尼

那謨薄伽跋帝一 啼隷路迦嚩囉底毘失瑟咤引折佉反下同耶二 勃陀引耶三 薄伽跋帝四 怛姪他五 唵引六 毘輸馱耶七 娑摩三漫多皤婆娑八 娑破囉拏揭底伽訶那娑婆引皤輸地＊九 阿鼻詵者蘇揭多伐折時設反下同那阿蜜唎多毘曬雞十此取圓字呼聲喚阿引訶＊羅阿訶＊羅十一 阿引瑜散陀引囉尼十二 輸馱耶輸馱耶十三 伽伽那毘輸輸律反下同提十四 烏瑟尼沙毘逝＊耶輸提十五 娑訶娑囉喝囉濕弭珊＊珠地帝十六 薩引婆怛他揭多地瑟咤引那頞地瑟恥帝＊慕嗢隷十七 拔折囉迦引耶僧訶多那輸提十八 薩婆伐＊囉拏毘輸提十九 鉢囉底你伐怛耶阿瑜輸提廿 薩末那＊頞地瑟恥帝廿一 末你末你廿二 怛闥多部多俱胝鉢唎輸提廿三 毘薩普吒勃地＊輸提廿四 社耶社耶廿五 毘社耶毘社耶廿六 薩末囉薩末囉勃＊陀＊頞地瑟恥多輸提廿七 跋折唎跋折囉揭鞞廿八 跋折藍婆伐＊都廿九 摩摩某甲 薩婆薩埵那

上迦引耶毘輪提卅 薩婆揭底鉢唎輪提卅二 薩婆怛他揭多三摩濕婆娑頗地瑟恥帝卅二 勃*嗢 勃*嗢卅三地反耶 蒲馱耶蒲馱耶三漫多鉢唎輪提卅四 薩婆怛他揭多地瑟咤引那頗地瑟恥帝三十五 娑婆訶

（2）経末の陀羅尼（志静改定本）

南謨薄伽上婆上低咥噭二合盧吉夜翌可反二合一 鉢羅上二底上合都里反下同毘上始瑟吒夜翌可反下同勃陀夜一云歸命聖尊三界勝覺尊但姪徒列反他二烏牟半三音毘輪陀上重夜麼麼四麼麼云某甲受持者於此自稱名 娑上曼多皤上婆重娑上馭叵二合囉上拏上伽上底伽上訶上那瑣婆重皤上舜入提五 阿上毘上重瑟者夜二合素上伽上多上婆上者那蜜嘍二合多毘上重訕礙皆反罽平六 阿訶上囉上阿訶上囉上七阿愈珊陀重囉上尼上八 輪陀上重夜輪陀上重夜九 伽上伽上那毘上舜入提重十 烏瑟尼二合沙疏我反毘上闍上夜舜入提重十一 娑上訶娑囉上合二囉上濕弭三朱長地低十二 薩囉皤上合多上他伽上多地上重瑟姹丑邊反二合那地上重瑟祉低十三 阿上地哩二合跋闍囉上合二迦夜僧訶上多上那上舜入提重四十 薩囉皤二合皤上囉上拏上毘上舜入提重五十鉢囉上合二底你夜多上婆上重夜十六 阿愈舜入提十七 娑上麼耶余何反地上重瑟祉二合低十八 麼你麼麼你十九多上他上多菩重多上俱知上跛唎上舜入提重二十 毘上娑普二合吒上勃地上重舜入提重二十二 闍上夜闍上夜廿二 毘上闍夜毘上闍上夜廿三 娑麼二合囉上娑麼二合囉上四廿勃上陀地上重瑟祉二合多上舜入提重五廿 跋闍噭二合跋闍囉上二合揭囉鞞重二合廿六 跋闍嚂二合婆上重皤上主觀麼麼廿七麼麼云某甲受持者於此自稱名 麼訶耶那上鉢囉上二合婆上重迦夜毘上舜入提重八廿 薩囉皤上合二伽上底跛唎舜入提重廿九 薩囉皤上合二多上他伽多上娑上摩戍阿二合娑地上重瑟祉二合低卅 勃陀重夜二合勃陀重夜二合勃陀重夜二合卅一 毘上菩長陀上重夜卅二 娑上曼多跛唎上舜入提重三卅 薩囉皤上合二多上他伽上多地上重瑟姹丑邊反二合那地上重瑟祉二合低卅四 莎訶卅五注平上去入者從四聲法借音讀注半音者半聲讀注二合者半上字連聲讀注重者帶喉聲重讀注長者長聲讀注反者從借音讀羅利盧栗黎藍等字傍加口者轉聲讀

この写経には経中陀羅尼の前にあるべき「此呪最後別翻」の夾註はなく、おそらく転写の際に脱落したと思われるが、経末陀羅尼の前には他本にない「同本別翻」の文言があり、本来原本には2種の陀羅尼と共にこの両文言が揃っていたと推測される。2種の陀羅尼は『大正蔵』仏陀波利訳本の高麗本、宋本（思渓資福蔵）、明本（径山蔵）のいずれとも異なる。ところが、すでに干潟龍祥氏や藤枝晃氏が指摘しているように、経中陀羅尼は地婆訶羅第二訳の宋本（磧砂蔵）と一致し、経末陀羅尼は杜行顗訳の宋本（磧砂蔵）と音写の文字までほとんど一致するという難解な問題がある[26]。

第1章で述べた経典翻訳の順に従えば、陀羅尼漢訳の順序は①杜行顗訳、②地婆訶羅第一訳、③仏陀波利訳、④志静となる。つまり、杜行顗訳は仏陀波利訳より早く成立しているので、天平写経の志静改定陀羅尼が杜行顗訳と一致するのは明らかに不自然である。また、地婆訶羅第二訳は訳出年代が明記されていないが、地婆訶羅は垂拱3年（687）末に没しているので、遅くとも垂拱3年までになる[27]。しかし、その陀羅尼が仏陀波利訳の経中陀羅尼と夾註まで一致するのは不可解である。次章ではこの問題に加え、唐代前期の仏陀波利訳陀羅尼の変遷について考えてみたい。

4　初期の仏陀波利訳本陀羅尼の変遷

天平写経の経末陀羅尼が杜行顗訳本と一致する問題について、干潟氏は、地婆訶羅が杜行顗訳本を見ながら志静に陀羅尼を口授したためと解している。一方藤枝氏は、杜行顗訳本がきわめて詳細な音注を有することから、志静が音注の不完全な杜行顗訳本のようなものを持っており、本文を若干改め、詳しい音注を与えたと解釈し、杜行顗訳の経には旧来の陀羅尼の代わりに志静の

改定陀羅尼が用いられたとみなす。また藤枝氏は、天平写経の経中陀羅尼が地婆訶羅第二訳陀羅尼と一致する問題についても、仏陀波利訳の陀羅尼が後から地婆訶羅訳本に紛れこんだと解している。つまり、杜行顒訳本と地婆訶羅第二訳本はいずれも元の陀羅尼を逸失したという見解である。

この問題についてはさまざまな可能性を検討してみる必要がある。例えば藤枝氏とは逆に杜行顒訳と地婆訶羅第二訳が後から仏陀波利訳の経中と経末に入り込んだという考え方もできよう。しかし、智昇が『開元釈教録』で述べているように仏陀波利訳が唐代前期にもっとも流行していたことは明らかで[28]、それは五台山文殊のいわば霊験に従ってこの経が将来されたことを喧伝する経序に負うところが大きかったのであるが[29]、とにかく敦煌写経にも天宝期までの石刻本にも、杜行顒訳や地婆訶羅訳とわかる尊勝陀羅尼経の経文はこれまでのところ一例も見いだされていない。もし仏陀波利訳本が霊験あらたかな由緒正しいものと考えられていたならば、仏陀波利訳本を書写する際に杜行顒訳本や地婆訶羅訳本の陀羅尼を挿入（もしくは誤入）する可能性は低いのではなかろうか。ただ、杜行顒訳は石山寺一切経中に天平宝字４年（760）の写経を確認でき、それは現行の杜行顒訳本と同一である[30]。もし天平11年写経の陀羅尼が他本から混入したものでないならば、８世紀中頃にはすでに杜行顒訳本の陀羅尼は仏陀波利訳本の経末陀羅尼に入れ替えられてしまっていることになる。

ところで、天平写経経末陀羅尼と蓮華洞本（藤枝氏のＧ本）とは本文訳字と夾註の内容で比較する限り別系統であるが、最後の発音法説明文だけはほとんど同じである。ただ、経末陀羅尼の夾註には蓮華洞本で記す「連」がない代わりに「二合」があって、「二合」を説明する最後の説明文との間に矛盾は生じない。このことから藤枝氏は、Ｇ本は天平写経経末陀羅尼と似た音写システムないしはそこから発展した音写システムをとりながら、説明文は経末陀羅尼のまま残ったものという見解を示された。この見解は妥当と思われ、Ｇ本系統が如意元年（692）の蓮華洞本にまで遡ることが明らかになった以上、天平写経の底本は如意元年よりも前の武周期にはすでに成立しており、天平写経の正統性を再確認できることになったとみてよいのではなかろうか。

天平11年写経の底本はおそらく玄昉が唐から将来した経典であろう[31]。玄昉将来経典は、開元18年（730）に完成し以後の一切経の選別・分類の基準となった『開元釈教録』と密接な関係がある。この点については、玄昉が天平７年（735）に帰朝した際、『開元釈教録』所載の当時最新の一切経を持ち帰ったとする見方もあるが[32]、『開元釈教録』のような最新版欽定一切経は唐皇帝の冊封を受けていない日本に一括して下賜されず、『開元釈教録』に基づき民間で個別に集めた経典とみなすべきという上川道夫氏らの見解を取るべきと考える[33]。ところが、手島一真氏によれば、そもそも『開元釈教録』は編纂当初は智昇の私撰であって、皇帝の命によって編纂され宮中で管理された「欽定」本ではないという[34]。そうなると、天平11年写経の底本は単純に当時の権威ある正統本の系譜にあるとはいえない。しかし、民間で集めたとしてもできうる限り正確な善本を求めた結果として、経序、経中陀羅尼、経末陀羅尼が完備したテキストを将来したとは考えられる。とにかく、中国の石刻本、敦煌写経で経末に陀羅尼が付いているものは管見の限り皆無であるから、天平11年写経は多少脱落や誤写があったとしても、経序が付け加えられた当初の仏陀波利訳原本にもっとも近いテキストとして位置づけられよう。

つぎに、房山天授２年（691）本については、夾註がないため本文訳字のみで比較すると、藤

枝氏の敦煌写経分類ではA本（S.2272）にもっとも近く、氏はこの系統に天平11年写経の経中陀羅尼のほか、天宝12年（753）河南登封嵩山永泰寺経幢、地婆訶羅第二訳の磧砂版を挙げる。また唐代前期の中国国家図書館所蔵拓本で判読可能なもの12件中、天宝12年永泰寺幢の他に西安と河南省の5件はこの系統に属すると考えられるし、王振国氏は山東省臨朐県博物館の開元18年（730）経幢もこの系統であるという[35]。少なくともこの時期中原から河北地域には広がって比較的流通していた陀羅尼といえる。

一方、房山天授2年（691）本にわずか1年遅れるだけの蓮華洞如意元年（692）本は、文化の中心地たる洛陽からほど近い龍門石窟に所在するため、洛陽における最新の流行本を反映している可能性があるが、類例がきわめて少ない。馮公行宝塔神功2年（698）本の他には、開元28年（740）の房山石経第8洞180[36]、同年の山東沂水杜儼造経幢が挙げられる程度である[37]。馮公行宝塔の所在伝来地からすると、同じ690年代にほぼ同じ地域にですら異なる陀羅尼が伝わっていたことがわかる。王振国氏によると、蓮華洞本の呪語の字形はあまり流暢ではなく、房山天授2年本の呪語の字形と音訓の方がかなり通俗でより流暢であるから、房山本の呪語は志静が地婆訶羅から梵語を学んで改定した後の呪とすべきであるという[38]。また、房山本は志静の改定を経た後読音と用字がかなり流暢になったため、経幢版本の主流となり、広く流行したとみなす。蓮華洞本の呪の訳文、用字はそれと比べると流暢とはいえず、あまり見ないもので、それゆえ広く流伝しなかったと結論づけている。

しかしながら、天平写経は経中陀羅尼の方が房山天授2年本に近く、最初の陀羅尼を改定したはずの経末陀羅尼は「唵」を「烏牟」と表記するなどあまり見られない用字を含み、王氏の指摘する“呪語の字形が流暢でない”蓮華洞本よりもさらに古い段階にあることが想定される。また、藤枝氏の考察によれば、天平写経の経末陀羅尼をさらに改変し、最後の発音法説明文だけを天平写経のまま残したものが蓮華洞本である。したがって、志静が詳しい音注を施した経末陀羅尼は通俗な訳字ではなかったため、それを改良して経末ではなく経中に入れたものが蓮華洞本であり、それでもなお読みやすい字とはいえず、そのため後世の写本や石刻にはあまり用いられず、刊本大蔵経にも残らずに消滅していったのではないかと考えておきたい[39]。

おわりに

本稿では、仏陀波利訳仏頂尊勝陀羅尼の信仰最初期に当たる唐代前期の尊勝陀羅尼の諸作例を挙げ、先行研究に拠りつつ分類し、天平写経を含めてそれらの成立順序について若干の考察を試みた。この陀羅尼が流布し始めた武周期にはすでにある程度の地域にまで異本が混在しながら伝来していたこと、経序が五台山文殊の信仰と結びついてこの経典の流行に大きな役割を果たしていながらも、その後半で述べている改定陀羅尼の意義はほとんど注目されず、この系統の陀羅尼が主流になることもなく、つぎつぎに陀羅尼が改変されていった様相がうかがえよう。しかし、天平写経の二つの陀羅尼の問題、またそのうち志静改定本に比定される経末陀羅尼と部分的に共通する蓮華洞本との関係については十分に論じ尽くせなかったため、今後の課題としたい。

註

1　『大正蔵』19、349a～352c。

2　それぞれ『大正蔵』19、353a～355a、355a～357a、357b～361c、361c～364b に収録。

3　仏頂尊勝陀羅尼については日本において多数の先行研究があるが本稿では特に以下の論考を参照した。干潟龍祥「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」（『密教研究』68、1939 年 1 月、34～72 頁）、藤枝晃「スタイン蒐集中の『仏頂尊勝陀羅尼』」（『神田博士還暦記念書誌学論集』平凡社、1957 年 11 月、403～421 頁）、佐々木大樹「仏頂尊勝陀羅尼の研究―漢訳諸本の成立をめぐって―」（『韓国仏教学 SEMINAR』10、2005 年、134～152 頁）、同「尊勝陀羅尼分類考」（『大正大学綜合仏教研究所年報』29、2007 年 3 月、129～156 頁）。

4　『大正蔵』19、349b 註 2 によると明本と黄檗版浄厳等加筆本には経序に「志静述」と記されているといい、経序の著者を志静と扱う向きもあるが、必ずしも志静が著者である確証はないと思われる。

5　智昇は『開元釈教録』巻 9 に「其序復是永昌已後有人述記。却叙前事致有参差（その序は永昌已後の人が述記したもので、かえって前事を叙述するのに食い違いが生じている）」と記す。『大正蔵』55、565b。

6　巻 12（『大正蔵』55、600a）。巻 19 入蔵録（同 708b）でも同じ順序とする。

7　『大正蔵』19、350b 註 8。

8　2010 年 8 月に中国敦煌研究院で開催された「慶賀饒宗頤先生 95 華誕敦煌学国際学術研討会」において、フランス極東学院の郭麗英（Kuo Liying）氏が「従石幢談敦煌的陀羅尼作法」を発表され、中国全土の陀羅尼経幢の地域別年代範囲・数量の表と分布地図を提示されたことを早稲田大学肥田路美教授からご教示頂いた。その時の配布資料（32～48 頁）には、研究の目的上個々の具体的作例を記載されてはいないが、7 世紀末から 13 世紀後半までの 300 件ほどの有紀年の経幢資料により、数量では陝西省がもっとも多く 65 件、河北、河南が各 46 件、浙江が 42 件に上ること、また山西省の 698 年（697 年の誤記か？）銘の経幢が最も古いことなどが示されている。

9　藤枝晃前掲註 3 論文。

10　王振国『龍門石窟与洛陽仏教文化』（龍門石窟研究文集、中州古籍出版社、2006 年 12 月）のうち、龍門石窟刻経（91～109 頁）、および洛陽経幢研究（123～187 頁）。

11　中国仏教協会・中国仏教図書文物館編『房山石経：隋唐刻経』第２冊（華夏出版社、2000 年）402 頁。

12　唐代の房山石経の陀羅尼には夾註が施されたものもあるが、長寿 3 年（694）の「仏説六門陀羅尼経」〔第 8 洞 44〕のように夾註がない例も見いだされる。『房山石経：隋唐刻経』２、407 頁。

13　葉昌熾『語石』巻 4 経幢八則「余所見、以如意元年史延福一刻、為最先。在龍門摩崖刻」。

14　藤枝氏は敦煌写経 S.2845、4616、3465、5344 の４点を挙げるが、王振国氏は後者 2 点を含めず、新たに北 7351 を挙げる。より厳密な比較からすれば、S.3465、5344 は除外した方がよいと考える。

15　北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』第 18 冊（中州古籍出版社、1989 年）124 頁、京 4583。

16　この「仏説地獄経」は『大正蔵』には収録されておらず、おそらく当時民間で流行していたが大蔵経には収録されず後に消滅した偽経の一つと考えられる。

17　楊衛東『古涿州仏教刻石』（河北教育出版社、2007 年）52 頁による。南魯坡村は現在も河北省涿州市に所在が確認できる。

18　陀羅尼は冒頭４字が欠損しているほか、さらにその上部の欠損部に５、６字分の空きが見込まれるため、陀羅尼の前の経文も刻まれていた可能性がある。しかし、宝塔が残っていないため、陀羅尼前の経文とこの拓本につづく末尾までの経文があったかどうか確認することはできない。

19　＊印を付けた文字のほとんどは口偏がなかったり偏や旁などの一部が異なったりするだけだが、第 5 行の「伽伽那毘秫提」後の夾註最後の二字は蓮華同本では「壘」となっている。これは「毗上」二字の誤写と思われる。また第 9 行「駛麼囉駛麼囉」の「駛」は蓮華同本と敦煌写経 S. 2845 では「馭」と表記されており、音からはこちらが元来の字で馮公行宝塔本では誤写されたと推定される。なお、蓮華洞本の翻刻に当たっては、王振国氏の前掲註 10 書 246～249 頁を参照したほか、現地における撮影画像、特に早稲田大学會津八一記念博物館助手大島幸代氏撮影画像によるところが大きい。

20 『北図拓本』第22冊の影印拓本、および2008年8月に隴県文化館にある経幢原石を実見し記録した結果による。なお当経幢調査では早稲田大学文学研究科博士後期課程（当時）の大島幸代氏、小野英二氏、友田真理氏3名の協力を得た。

21 京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料のインターネット・サイト http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/index.html により確認。番号 tou1178x。

22 『北図拓本』第17冊113頁。永昌元年8月刻と記すがおそらく経序中の年月を造幢年と誤解しており、紀年はない。題額に「上為開元神武皇帝」とあることから玄宗期のものとわかる。

23 郝承琳「閬中鉄塔仏頂尊勝陀羅尼経序拓片介紹」（『四川文物』1991年第3期、36～39頁）の録文より確認。ただし誤読もあるように見受けられる。同報告によれば鉄塔はすでになく、拓本のみ残っているという。

24 四川省文物考古研究所編、曹丹・于春撰文『四川安岳臥仏院唐代刻経窟』（四川出版集団・天地出版社、2009年）に拓本が掲載されているが、惜しくも壁面下部に当たる部分が収録されていないため、全文の確認はできていない。

25 奥書には「奉勅、為玄昉僧正疾疫、敬写此経一千巻」とある。全文の確認は影印本『仏頂尊勝陀羅尼経：国宝』（荻野伸三郎発行、荻野三七彦解題、1937年）による。

26 干潟龍祥、藤枝晃前掲註3論文参照。なお、地婆訶羅第二訳の陀羅尼は磧砂蔵と『大正蔵』宋本（思渓資福蔵）とでそれほど大きな差はない。

27 アントニーノ・フォルテ氏は地婆訶羅第二訳を687年とするが、地婆訶羅はこの経典の翻訳に積極的に関与していないとみなしている。アントニーノ・フォルテ（船山徹訳）「地婆訶羅にかんする漢語史料」（『中国宗教文献研究』臨川書店、2007年、109～117頁）参照。地婆訶羅の没年は『華厳経伝記』巻1の伝記（『大正蔵』51、155a）による。

28 『開元釈教録』巻9「比諸衆訳、此最弘布」（『大正蔵』19、565b）。

29 三崎良周「仏頂尊勝陀羅尼経と諸星母陀羅尼経」（牧田諦亮・福井文雅編『敦煌と中国仏教』〈講座敦煌7〉、大東出版社、1984年、115～129頁）参照。

30 石山寺一切経第28函第21号、紙本墨書、国指定重要文化財。巻子装を折本に改めてあり、経題は「仏頂勝陀羅尼経」となっている。奈良国立博物館仏教美術資料研究センターに保管される写真資料（原版番号 A284754, A284756, A284758, D041263, D041265, D041267, D041268）により全文を確認し得た（2011年8月26日閲覧）。石山寺文化財綜合調査団編『石山寺の研究：一切経篇』（法蔵館、1978年）237頁によれば坤宮官一切経の一つと推定され、奥書には初校・再校の署名があることから、奈良朝における標準テキストを底本にしたきわめて忠実な写本とみなすことができる。なお、同一切経中には奈良時代の仏陀波利訳写本も含まれているが、こちらは未見である。

31 皆川完一「光明皇后願経五月一日経の書写について」（『日本古文書学論集』3古代1、吉川弘文館、1988年）等参照。

32 中井真孝「奈良仏教」（『日本歴史大系』1原始・古代、山川出版社、1984年、第二編第三章第四節第二項）。

33 上川通夫「一切経と古代の仏教」（『日本中世仏教史料論』吉川弘文館、2008年、100～132頁）、前掲註31皆川論文等。また上川通夫「尊勝陀羅尼の受容とその転回」（中野玄三・加須屋誠・上川通夫編『方法としての仏教文化史:ヒト・モノ・イメージの歴史学』勉誠出版、2010年、119～155頁）も参照。

34 手島一真「唐代宮中の仏教と道教―金仙公主の場合―（上）」（『立正史学』78、1995年9月、31～49頁）。

35 一言一句が一致するわけではないが、開元18年（730）河南沁陽興隆寺経幢（経序なし、夾註なし）、天宝5年（746）陝西西安興聖寺経幢、天宝7年（748）西安崇仁寺経幢（夾註のない陀羅尼のみ）、天宝9年（750）河南登封永泰寺経幢、天宝11年（752）河南洛陽曹文玉石燈台記が挙げられる。なお王振国氏は国家図書館拓本の10件中9件が天授2年本で1件が蓮華洞本とするが、ここでは本文訳字が天授2年本とわずかに異なる隴県経幢の系統を分けて考える。

36 『房山石経：隋唐刻経』第3冊、332頁。

37 『北図拓本』第24冊107～115頁の拓本は剪装本のため、併せて早稲田大学會津八一記念博物館所蔵加

藤淳金石拓本コレクション H33（ただし一部欠）により確認した。これと房山石経第 8 洞 180 本はいずれも経序があり、陀羅尼本文の訳字はほぼ一致するが、夾註がまったくない。

38　王氏は「例えば“馁”（音 sā）字は洛陽方言で“三”字の読音だが、房山本と後のほとんどの訳本はいずれも“三”と訳している」という。この字は蓮華洞本で 4 回使用され、正確には房山天授 2 年本では 4 つめに当たる部分が判読できず、類似の本で“三”になっていることを指していると思われる。他の箇所の“馁”字は“娑”か“薩”になっている。

39　刊本大蔵経における仏陀波利訳本の陀羅尼の変遷については、稿を改めて論じたい。